View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Yokohama Journal of Nursing Vol.1, No.1, pp. 10-17, 2008

原　著

前期高齢者の自我同一性とHavighurstの発達課題との関連
― 男女差からの検討 ―

Relationship between Havighurst's Developmental Tasks and Ego Identity in the Young Elderly : Gender Differences

服部　紀子[1)]　Noriko Hattori
島田今日子[1)]　Kyoko Shimada
長田　久雄[2)]　Hisao Osada

本研究では、前期高齢者の自我同一性と中年期及び老年期発達課題との関連を男女差から明らかにすることを目的とした。前期高齢者484人を対象に自我同一性はエリクソン心理社会的段階目録の日本語版を用い、中年期及び老年期発達課題は、Havighurstの発達課題をもとに質問紙調査票を作成し、測定した。前期高齢者の自我同一性の成熟をHavighurstの発達課題の観点から検討した結果、自我同一性の成熟に影響していた課題は、男女で多くの違いがみられることが明らかになった。男性は中年期の発達課題である「若者によい大人としてのモデルを示す」、「状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につける」、「親が老後の生活に満足できるように援助する」が自我同一性に影響する課題であった。女性は、中年期の発達課題である「状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につける」、「自分を魅力的に保つように気をつける」、「年をとっても続けられる活動をみつける」、老年期発達課題「自分と同年齢の人たちとの交流をもつ」が自我同一性に影響する課題であった。前期高齢者の自我同一性の成熟に向けての支援は男女で異なり、男性では何らかの仕事を継続し、次世代を担う若者の育成に関わることができる、女性では余暇活動への参加や新たな人間関係づくりができる支援の必要性が示唆された。

Abstract

The objective of this study was to investigate gender differences in the relationship between ego identity of the young elderly, and developmental tasks in middle age and later maturity. A survey questionnaire was assessed using the Japanese version of the Erikson Psychosocial Stage Inventory for assessing ego identity, and Havighurst's developmental tasks for developmental tasks in middle age and later maturity. The survey was then administered to 484 young elderly people. Results of the study, examining the maturity of ego identity among the young elderly from the perspective of Havighurst's developmental tasks, demonstrated many gender differences in tasks influencing the maturity of their ego identity. For males, the following developmental tasks in middle age influenced their ego identity: "becoming a role model for adolescents," "acquiring skills essential for work (including housework)," and "providing support to aged parents to fulfill their lives." For females, developmental tasks in middle age such as "acquiring skills essential for work (including housework)," "maintaining attractiveness and charm," and "finding activities doable as one ages," and the developmental task in later maturity, "having social rela-

Received : November. 30,2007
Accepted : February. 28,2008
1）横浜市立大学医学部看護学科
2）桜美林大学大学院

tionships with people in the same age group," are the tasks influencing their ego identity. In addition, there were also gender differences in support of maturation of ego identity among the young elderly. While males suggested support necessary to maintain their jobs and being engaged in training youth for future generations, females suggested support necessary to participate in leisure activities and to build new relationships.

Ⅰ　はじめに

Erikson[1] は、人間の生涯発達の過程を理解するために、自我同一性の概念を導入し、ライフサイクルに沿った自我の発達を心理社会的発達段階として定式化した。Erikson によれば、ライフサイクルの最終段階である老年期の心理社会的課題は「統合性（integrity）」である。これは自我のなかに蓄積された確信であり、自分のただ一つの人生周期を、そうあらねばならなかったものとして、またどうしても取り替えを許されないものとして受け入れることができ、死に対して安定した態度を持てることである。人生の最期の段階である老年期にある人々が「統合性」という課題を達成し、老年期において自我同一性の感覚を獲得することは人が人として最期を全うするために重要である。岡本[2] は、自我同一性の獲得の中心的課題として死の受容をあげ、その関連を調査した。老年期における死の受容には老年期以前の人生段階における心理社会的課題の達成、およびそれを支える自我の強さを基盤に達成されることを示唆する結果を得ている。しかし、その他の具体的な発達課題との関連を調査した研究は少ない。

具体的にどの発達課題の達成が自我同一性の達成状況と関連するのかを明らかにすることは、自我同一性の獲得を支援するうえで重要である。しかし、Erikson 自身は各段階にそった具体的な発達課題を示していないため、本研究においては、自我同一性の発達に影響する要因となる発達課題として、Havighurst の発達課題を用いることにする。人間の発達は、その個人が何を学習するかにより異なるとし、人生で学ぶべき発達課題は、一定の時期に生じる個人の欲求と社会からの要請によって生じる課題であり、その達成はそれ以後の課題達成を可能にし、失敗はそれ以後の課題達成を困難にすると Havighurst[3] は論じ、人生の段階を 7 段階に分け課題を提示している。Erikson のⅠ段階～Ⅳ段階は Havighurst の幼児期から中期児童期にあたり、Ⅴ～Ⅷ段階は青年期から老年期にあたり、発達段階のとらえ方の齟齬も少ないと考える。また、Havighurst は、人間の発達と行動を教育に関連づけて具体的な発達課題を提示しており、看護学領域においても看護の対象の発達段階の理解において Havighurst を活用しており自我同一性の感覚を高めるための介入を分析することは有用であると考える。

老年期の自我同一性の成熟は、現在の課題への取組状況とともに成人期とそれ以前の発達課題の達成が影響することを踏まえ、Erikson の心理社会的発達理論における自我の同一性の発達と Havighurst の中年期発達課題および老年期発達課題との関連を検討することによって、自我同一性の発達を促進する要因となる行動が特定できると考える。

岡本ら[4) 5)] の成人期にみられる自我同一性達成のプロセス、および成人期にみられる自我同一性危機についての研究では、60 歳前後の定年退職期は成人期における同一性の危機期であり、青年期に獲得された自我同一性は、成人期に遭遇する同一性の危機を解決することによって、さらに発達・成熟していくことを示唆する結果であった。これらを踏まえ、危機を解決した時期となる前期高齢者を対象とし、自我同一性の発達・成熟の要因を発達課題から検討する。

さらに、Erikson[1] の漸成的発達理論の基礎にある前提は、人が成長するに従って社会生活の拡大を認識し、社会との相互作用によって発達することである。男性と女性は、生活圏内の文化に規定された社会的役割により成長する道筋で経験する内容が大きく異なるため、心理社会的発達課題の達成やそれに影響する要因が異なることが予測され、本研究においては前期高齢者の自我同一性の感覚と中年期および老年期発達課題の達成感覚との関連を男女差から検討する。その結果から統合感を高めるための支援についての示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ　方法

1.　調査協力者

成人後期と前期高齢期の比較において、自我同一性と発達課題との関連を検討する目的で A 同窓会名簿から抽出した 50 歳～ 74 歳の男女に 4000 人に質問紙調査を実施し、1512 人（回収率 37.8 %）から回答が得られた。本研究の分析対象は、65 歳～ 74 歳の前期高齢者とし、質問項目に欠損値がない 484 人（男性 259 人、女性 225 人）とした。

2.　実施方法

2006 年 10 月郵送留置法により質問紙調査を実施した。返信締め切り後、再度調査への協力依頼のための葉書を

郵送した。

3. 調査項目

本調査では自我同一性、発達課題に関する調査項目を用いた。

1）自我同一性感覚

老年期の同一性を過去の体験が再統合された結果として形成されてきた自己概念として、それぞれの心理社会的な発達課題の達成度を測定して、現在の同一性の達成状況をとらえる。

自我同一性感覚の測定のために、Rosenthal, Gurney& Moore[6] によるエリクソン心理社会的段階目録検査（Erikson Psychosocial Stage Inventory; 以下 EPSI）の日本語版[7] を用いた。EPSI は Erikson によって定式化された自我の発達段階図式に対応し、それぞれの段階に特有な心理社会的危機をうまく解決した結果として個人がもち得る達成感覚を測定しようとしたもので、8つの下位尺度 56 項目から構成されている。「とてもよくあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求め、4点から0点に得点化した。下位尺度の得点を合計した総得点を自我同一性の達成レベルとし、高得点ほど達成感覚が高いと評定される。EPSI 尺度日本語版の信頼性、妥当性は佐方・中西[7)－10)] によって確認されている。

2）Havighurst の発達課題

Havighurt は、幼児期から老年期の発達課題の7段階を設定している。本研究では、中年期および老年期における発達課題を用い、質問紙を作成した。Havighurt の発達課題についての論述をもとに、それぞれの発達課題から項目を設定した。中年期は7つの発達課題から 12 項目、老年期は6つの発達課題から9項目、計 21 項目の質問で構成した。

質問は、その段階で経験しなければならない課題を具体的な行動レベルで示した。中年期発達課題では過去から現在までに経験したかを問うため「～してきましたか」とし、老年期発達課題は現在経験しているかを問うため「～していますか」と表現した。「とてもよくあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で回答を求め、3点から0点に得点化し、高得点ほど課題達成感が高いと評定した。

質問項目は、2004 年中高年者生き方に関する調査[11] 実施に際して老年学専攻大学院生によって検討され、調査実施後さらに修正したものである。調査結果から、１つの選択肢に協力者の 80％以上が回答している項目、標準偏差が小さい項目をチェックし、質問項目としての識別能力を判断した。さらに、それぞれの課題を評価する質問項目毎の相関係数のうち 0.6 以上の相関があるかどうか検討した。その結果、回答の分布に偏りはなく、識別力はあったと判断した。「中年期発達課題」12 項目の Cronbach α 係数は 0.82、「老年期発達課題」9項目は 0.78 であった。項目間の相関係数が高い質問項目については、質問文に同一の語彙を使用していることが原因と考え、修正した。

3）社会人口的背景

性別、年齢、家族形態、学歴、有償労働、健康に関する項目を設定した。

4. 分析方法

分析には SPSS12.0J for Windows を使用した。自我同一性には EPSI 尺度では総得点を、中年期および老年期の発達課題の項目ごとの達成感覚については、それぞれの項目得点を算出した。EPSI 尺度の総得点と発達課題については、性による比較をするために t 検定を用いた。自我同一性に関連する発達課題要因を検討するため、男女別に EPSI 尺度総得点と各発達課題のそれぞれの項目得点との Pearson の相関係数を求めた。EPSI 尺度総得点を目的変数、発達課題項目を説明変数とした重回帰分析を実施した。

5. 倫理的配慮

本研究は横浜市立大学の倫理委員会の承諾（受付番号 18-2B-13）を得て実施した。調査票郵送者へは、回答は個人の自由意志であり、無回答による不利益は生じないこと、得られたデータは研究にのみ使用し、統計的に処理すること、回答者個人の特定はされないこと、調査票の回答と返信をもって調査協力の同意となる旨を明記した書類を本調査票と共に同封した。さらに同窓会事務局長からの名簿使用の承諾書も同封した。

Ⅲ 結果

1. 対象者の基本属性

対象者の男女における年代毎の人数に統計的な有意な差はなく、偏りは認められなかった。平均年齢は、男性 69.2（SD=2.9）歳、女性 69.2（SD=2.7）歳で、男性 259 人、女性 225 人であった。（図1）

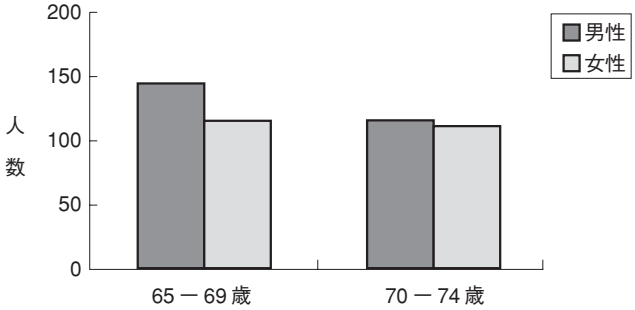

図1 性・年代別人数

表１　EPSI 尺度総得点と下位尺度得点間の相関係数　n=484

	総得点	信頼性	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性	生殖性
総得点								
信頼性	.76							
自律性	.84	.62						
自主性	.85	.59	.75					
勤勉性	.81	.48	.60	.68				
同一性	.89	.62	.73	.71	.74			
親密性	.70	.51	.50	.51	.49	.52		
生殖性	.82	.52	.61	.67	.69	.73	.58	
統合性	.82	.66	.65	.63	.57	.74	.48	.57

全項目 p<.01

表２　男女別 EPSI 尺度総得点と下位尺度得点の平均値の比較

	全体	男	女	t 値	
	n ＝484 mean （SD）	n ＝259 mean （SD）	n ＝225 mean （SD）		
総得点	143.1（25.5）	141.8（25.2）	144.6（25.7）	1.20	n.s.
信頼性	16.4 （3.6）	16.0 （3.4）	16.9 （3.8）	2.71	**
自律性	18.4 （4.0）	18.0 （3.9）	18.8 （4.2）	2.14	*
自主性	17.7 （3.7）	17.7 （3.7）	17.7 （3.7）	0.13	n.s.
勤勉性	18.5 （4.1）	18.4 （3.9）	18.6 （4.2）	0.45	n.s.
同一性	19.2 （4.2）	19.0 （4.1）	19.4 （4.2）	1.14	n.s.
親密性	17.6 （3.9）	17.4 （3.8）	17.9 （3.9）	1.54	n.s.
生殖性	16.7 （3.8）	16.8 （3.7）	16.6 （3.9）	0.68	n.s.
統合性	18.6 （4.0）	18.5 （4.0）	18.7 （4.1）	0.71	n.s.

*p<.05,　**p<.01,　n.s. no significance

表３　男女別発達課題得点の平均値の比較

		男	女	t 値	
		n ＝259 mean （SD）	n ＝225 mean （SD）		
中年期発達課題	若者によい大人としてのモデルを示す	1.88（0.65）	2.06（0.59）	3.27	***
	若者が一人前の大人になるように援助する	1.79（0.61）	2.02（0.69）	3.91	***
	地域社会の問題に関心を示す	1.67（0.78）	1.84（0.78）	2.43	*
	地域社会に住む人たちが幸せになるための活動をする	1.45（0.82）	1.60（0.82）	1.97	*
	年をとることによって起こる心身の変化についての知識を持つ	1.89（0.63）	2.02（0.67）	2.27	*
	自分を魅力的に保つように気をつける	1.77（0.70）	1.93（0.73）	2.41	*
	親が老後の生活に満足できるよう援助する	1.78（0.80）	1.95（0.81）	2.21	*
	状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につける	1.98（0.63）	2.30（0.56）	5.90	***
老年期発達課題	現在の収入に応じた生活をするように心がける	2.15（0.56）	2.29（0.65）	2.57	*
	自分と同年齢の人たちとの交流をもつ	2.22（0.65）	2.38（0.67）	2.70	**
	高齢者の問題を改善するための知識をもつ	1.59（0.70）	1.75（0.73）	2.45	*
	親しい人の死を自分なりに乗り越えた	1.93（0.64）	2.24（0.75）	4.83	***

*p<.05,　**p<.01,　***p<.001

表４　男女別 EPSI 尺度総得点と発達課題得点との相関係数（0.3 以上）

		EPSI 尺度総得点	
		男性 n ＝259	女性 n ＝225
中年期発達課題	若者によい大人としてのモデルを示す	.52 **	.42 **
	若者が一人前の大人になるように援助する	.41 **	.43 **
	地域社会の問題に関心を示す		.39 **
	地域社会に住む人たちが幸せになるための活動をする		.33 **
	年をとっても続けられる活動をみつける		.49 **
	満足できる余暇活動に参加する		.40 **
	体の状態の変化にあわせて活動するための知識をもつ	.33 **	.49 **
	年をとることによって起こる心身の変化についての知識をもつ		.45 **
	自分を魅力的に保つように気をつける	.36 **	.45 **
	親が老後の生活に満足できるよう援助する	.34 **	
	状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につける	.45 **	.48 **
老年期発達課題	新しい生活の習慣をつくりだす	.34 **	.34 **
	自分と同年齢の人たちとの交流をもつ	.35 **	.44 **
	高齢者の問題を改善するための知識をもつ	.31 **	.45 **

**p ＜ .01

表5　男女別 EPSI 尺度総得点を従属変数とした重回帰分析

		男性 n=259		女性 n=225	
		(β)	(r)	(β)	(r)
中年期発達課題	若者によい大人としてのモデルを示す	.37 ***	.52 **		
	年をとっても続けられる活動をみつける			.23 ***	.49 **
	自分を魅力的に保つように気をつける			.23 ***	.45 **
	親が老後の生活に満足できるよう援助する	.22 ***	.34 **		
	状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につける	.33 ***	.45 **	.24 ***	.48 **
老年期発達課題	自分と同年齢の人たちとの交流を持つ			.20 ***	.44 **
	重相関係数	.64 ***		.69 ***	

**p <.01 ,　***p <.001

家族構成では男女とも家族との同居者が約 90 %で、男性は配偶者と二人暮らしおよび配偶者と複数の家族と暮らしている割合が高かった。学歴では、男性が大学卒業の割合が多く、女性は高等学校卒業が多かった。男性は有償で働いている割合は約 50 %であり、女性は 30 %だった。主観的健康感に男女差はなく、80 %以上が健康であると感じていた。

2.　EPSI 尺度得点

EPSI 総得点の Cronbach α 係数は男性 α =0.93、女性 α =0.92 であった。総得点は同一性の達成度の評価が可能な測定尺度といえる。総得点及び下位尺度項目間の相関係数を求めたところ全ての項目間で有意な（p<0.01）正の相関が認められた。（表 1）

男女別に、EPSI 尺度の 8 つの下位尺度得点と総得点それぞれの平均値の差の検定を行った。（表 2）その結果、EPSI 尺度総得点において有意な差は認められなかったが、下位尺度信頼性得点（t（482）=2.71、p<0.01）自律性得点（t（482）=2.14、p<0.03）において、男性に比べ女性の平均値が有意に高かった。

3.　Havighurt の発達課題得点

Havighurt の発達課題得点の Cronbach α 係数は「中年期」男性 α =0.8 ・女性 α =0.83、「老年期」男性 α =0.78、女性 α =0.77 であった。男女別に、中年期および老年期発達課題の項目ごとの得点それぞれの平均値の差の検定を行った。（表 3）その結果、ほとんどの項目について男性に比べ女性の平均値が高い傾向にあった。中年期発達課題 12 項目のうち 8 項目、老年期発達課題 9 項目のうち 4 項目において、男性に比べ女性の平均値が有意に高かった（p<0.05 ～ p<0.001）。

4.　EPSI 尺度得点と Havighurt の発達課題得点との関連

男女別に自我同一性の達成感覚と発達課題達成感覚との関連をみるために、EPSI 尺度総得点と発達課題得点の Pearson 相関係数（すべて両側検定）を求めた。中年期発達課題について、男女ともに「老親との関係がうまくいくように助言を受けたことがある」以外の全項目で有意な正の相関が認められた（r=0.52 ～ r=0.15）。老年期発達課題では、男女ともに「お金がかかる活動を減らしている」「自分の状態にあわせながら活動を縮小している」で負の弱い相関を示し、他全項目で有意な正の相関が認められた（r=0.45 ～ r=0.14）。

次に男女別に EPSI 尺度総得点を目的変数とし、EPSI 尺度総得点と r=0.3 以上の相関が認められた発達課題の項目得点（表 4）を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、EPSI 尺度総得点と有意な関連が認められた変数は、男性では、「若者に良い大人としてのモデルを示してきた（β 0.37、p<0.00）」「状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につけてきた（β 0.33、p<0.00）」「親が老後の生活を満足できるように援助してきた（β 0.22、p<0.00）」で、重相関係数（R）0.64、p<0.00 であった。女性では、「状況に応じて仕事（家事を含む）に必要なことを身につけてきた（β 0.24、p<0.00）」「自分を魅力的に保つように気をつけてきた（β 0.23、p<0.00）」「年をとっても続けられる活動をみつけた（β 0.23、p<0.00）」「自分と同年齢の人たちとの交流を持っている（β 0.20、p<0.00）」で、重相関係数（R）0.69、p<0.00 であった。（表 5）

Ⅳ　考察

意味のある人生を全うするために老年期における自我同一性の獲得への支援は重要である。そこで本研究では、前期高齢者を男女別にして自我同一性感覚と Havighurt の発達課題達成感覚との関連を検討した。

EPSI 尺度総得点において男女間で有意な差は認められなかったが、下位尺度である信頼性、自律性において男性に比べ女性の得点が高く、有意な性差があるという結果が得られた。また、EPSI 尺度総得点及び下位尺度項目間の関連は中～高い相関が認められた。これらの結果から前期高齢者の自我同一性感覚に男女差はないが、自我同一性感覚を形成する「周りの世界および自己への信頼感」である信頼性の感覚、「自らが自由に選択し決断でき

るという有能感を持ち、自分に対して疑惑や恥を感じていない」といった自律性の感覚については、性差があり女性の達成感覚が高いことが示された。また、自我同一性感覚の程度を示す8つの段階毎の達成感覚は相互に関連しあっていると言え、Erikson[1]の段階ごとの心理社会的発達課題は他のすべての課題と相互に関連しているという理論と一致する結果であった。

佐方[12]が行った高齢者（平均年齢69歳，範囲60～86歳）を対象にした調査では、EPSI尺度総得点および下位尺度得点の全てにおいて性差は認められていない。また、佐方・中西ら[9][10]が行った成人期を対象とした自我同一性の調査においても、本研究結果と同様にEPSI尺度総得点に性差は認められていないが、下位尺度得点においては性差が認められていた。前述の研究結果からは、成人期では信頼性、自主性、生殖性、統合性に性差があり、いずれも女性の達成感覚が高いことが報告されている。この男女差は、各発達段階の発達的危機をどう受け止め、どう取り組むかの違いによると考えられている。これらの結果は、成人期から老年期にかけて発達的に危機に対する受け止め方、取り組む姿勢に性差がなくなる傾向にあることを示し、このことは性による社会的役割の違いが明確でなくなり、個人的要求が変化したことによって生じた結果と考えられる。今後、発達的危機をどう受け止め、どう取り組むかといった観点からの検討が必要であろう。

Havighurtの発達課題得点について、女性は男性に比べ中年期発達課題および老年期発達課題ともに高得点であった。前期高齢期にある男性と女性によって課題達成感覚の程度が異なることが示された。高井[13]は、60歳から70歳の男性は対人関係の持ち方として閉鎖的・防衛的姿勢や自己優先的姿勢を強める傾向があり、相手を理解することよりも自分の内部に閉じこもり自分のことを分かって欲しいという気持ちが強まると報告している。また、堀ら[14]は、老後の生活設計と人間関係の持ち方として、50歳以上の男性は配偶者や親戚に向かいやすく、女性は血縁関係を超えた社会活動の友人等に広がりのある関係を持つ傾向にあると述べている。課題達成感覚が男女で異なる一要因として、社会との相互作用のあり方に関わる一つである人間関係の持ち方によって課題達成の程度に違いがあると考えられる。高齢男性が社会関係を形成するきっかけは「職場・仕事を通じて」であり、「趣味の活動や飲食店等の常連であること」が関係継続の契機として重要であることが指摘されている[15]。高齢男性の場合、社会との関係を維持し、発展させることで、さらに自我同一性と関連する課題が達成できると考えられる。

次に、男女別にEPSI尺度総得点に影響する要因を各発達課題得点から検討した結果、前期高齢者の自我同一性感覚に影響する要因として、「状況に応じて仕事（家事）に必要なことを身につけてきた」課題に対する達成感覚は男女共通であった。Erikson[1]の心理社会的発達理論の中で、人格は社会との相互作用で発達し、その社会との関わりの重要なひとつとして仕事をあげている。変化する社会において状況に応じて仕事（家事）に必要なことを身につけてきたという経験は、仕事に積極的に関わったことを意味し、自己に対する有能感を生じ、人生を統合し、さらには自我同一性感覚の成熟に役立つものであると言える。

岡本ら[4]は定年退職期にある男性を対象に定年退職に対する認知と自我同一性との関連を調査している。定年退職を積極的に受け入れているタイプは自我同一性が高く、これは退職を危機として認知、解決し成熟に向かった結果であると考察している。退職を危機と認知することは、仕事に積極的に関わってきたことに由来する。危機を認知し解決を模索している状態は成長の転帰となる。本研究における前期高齢者の自我同一性感覚と状況に応じて仕事（家事）に必要なことを身につけてきた達成感覚との関連が見いだせたことは積極的に職業生活を過ごし、退職による危機を認知し、なんらかの解決策を見いだせた結果といえる。

さらに職業に家事を含めたかたちで課題「満足できる職業を選択し維持する」を質問したが、女性にとっても主体的に関わり内面の充実につながる課題といえる。堀内[16]は中年女性の自我同一性の変化を専業主婦群と有職群に分けて分析した結果として、職業は自我同一性の安定的な基盤となるが、家庭役割はなりにくいと推察している。本研究の協力者は中年期に家族の成長とともに家庭役割が減少するなか、これまでの自己の役割に対する意味を見失うという危機に直面し家庭役割についての再検討が行われ、その意味を認識することができた結果として課題達成感覚の高さが自我同一性との関連につながったと考えられる。さらに、家庭役割に代わる自己の内面の豊かさに貢献できる新たな活動への移行がなされたことは、中年期の課題である「自分を魅力的に保つように気をつけている」、「年をとっても続けられる活動をみつけた」、そしてさらに高次の段階の課題である「自分と同年齢の人たちとの交流をもっている」といった課題達成感覚が自我同一性に影響を与えていることから推察できる。山田[17]は余暇活動のなかでも、とくに創造性、自己表現を特性とする活動は心理社会的発達を促進する要因であること示唆している。

男性では、「若者によい大人としてのモデルを示している」課題達成感覚は、自我同一性感覚に影響する要因であったが、女性では認められなかった。岡本[18]は仕事の場で後輩が一人前になっていくための支援をすることによってキャリア発達が遂げられ、自我同一性感覚の成熟につながることを示唆している。さらに、Erikson[19]は、高齢者は子どもが責任ある大人に育つためには、責任ある大人との間の信頼できる人間関係が必要であるとして

いる。このため高齢者は信頼される大人になることが自分達の責任であると感じているとの報告がある。次世代を担う若者の育成に関わることは、自我同一性の発達につながるといえる。本研究の協力者である男性も家庭内にとどまらず広く社会の場で活動し、次世代を担う若者との関係を築くことで、同様の傾向になったと考えられる。家庭のなかでの子どもを育てる経験と、広く社会の場で若者を一人前に育てる経験に対する意識の違いが自我同一性感覚への影響の有無につながっていると考えられる。女性において自我同一性の発達に影響を与えていた課題であった年をとっても続けられる活動をみいだし、実践することを通して、次世代を担う若者を育てる関わりに挑戦することが可能となると考える。

「親が老後の生活を満足できるように援助してきた」課題は、男性で自我同一性感覚に影響していたが、女性では影響要因ではなかった。老親への援助には経済面、身体面など様々なかたちがある。身体介護が必要な場合では、女性介護者は男性介護者に比べ介護者役割を自由に選択できず、介護者役割を引き受ける場合が相対的に多く[20]、介護負担感も高い[21]ことから、懸命に援助をしてきたが、内面的には介護を受け入れることができず、自己成長につながらず自我同一性の発達への影響要因となりえなかったと推察される。在宅介護家族の成長を支援することは、自我同一性の発達へつながるものである。老親とその子どもの家族が同居し、互いに支え合いながらの生活は、親にとっては孫の世話、家事等様々な社会的役割が果たせる場となり、子どもにとっても親への援助が多様なかたちでで き、世代を超えてこれまでに積み残した課題を解決することができる。しかし、現在は核家族化が進行し、高齢者のいる世帯に占める単独世帯や夫婦のみ世帯は、増加傾向が続いている[22]。今後、発達課題の様相も変化することになるであろう。

Havigurst[23]は老年期における発達課題はこれまでの役割喪失に伴い、新たな課題を身につけること、あるいは再度身につけることは個人の意志にまかせるとしている。男性は中年期の中心的発達課題の継続を老年期における適応のあり方としており、自我同一性感覚との関連が認められた。

女性の自我同一性と関連がみられた発達課題は、社会から要求される義務が減少するなか「自分を魅力的に保つように気をつける」、「年をとっても続けられる活動をみつける」といった個人の価値観によって生じる発達課題のなかに自己の有能感をみいだしていることが推察できる。身体的衰退は、とくに若さ、美しさを追求する女性にとって自我同一性の混乱に関連する大きな課題である。さらにこれまでに意味を見いだしていた活動範囲を縮小しなければならない。自己を形作っていた美しい容姿や活動を以前と同じように誇りとし楽しむことを維持しようと取り組んでいると同時に今後衰退していく自己に見合うかたちでの活動をみいだしている。このような課題達成は自我同一性の成熟につながると考えられる。次に、老年期の発達課題である同年齢集団との関係形成についてHavighurt[23]は高齢者としての社会的地位を承認し、同年齢の人々の間で建設的な一員となることであると述べている。同年齢集団の交流なかには高齢者問題を解決するといった社会に影響を及ぼす集団からレクリエーションを楽しむという集団まであり、どのような集団に所属するかによって得られる内容は多様である。齋藤[24]は高齢者間の交流が情緒的サポートや手段的サポートの授受の場となることを明らかにしている。自己の価値観によって選択し、意味のある交流をすることは、仲間同士互いの不安や喜びといった心情を表出でき心理的な相互の安寧が得られ、また、自身が他者に貢献できることを提供するなど緒問題に対処することが、自我同一性の成熟につながると考えられる。

Ⅴ　結論

定年退職前後の時期に生じる様々な事象を契機に、自我同一性の再吟味と将来の再方向づけを行い、この危機を乗り越え自我同一性の成熟に向かっていると考えられる前期高齢者を対象に自我同一性と関連がある要因を男女別にHavigersutの発達課題から検討した。その結果、前期高齢者の自我同一性の成熟に影響を与える発達課題は男女で異なり、男性は、ある状況に応じて職業（家事）に必要な知識を身につけるといった職業維持に関連する達成感覚を高め、老年期においても、何らかのかたちで職業を継続し、次世代を担う若者の育成に携わることであった。一方、女性では、自我同一性感覚の基盤になりにくい家庭役割に対する意味づけと老年期においては、家庭役割に代わる余暇活動や同年齢集団との関係をつくることであった。

男性は社会からの要求への貢献が自己の価値観からの要求と重なる仕事の継続が、女性は自己の価値観から生じる余暇活動への参加、人間関係をつくることが自我同一性の成熟に向けての支援となると考えられる。

本研究にご協力いただきました同窓会事務局長および同窓会会員の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は平成18年～19年度科学研究費補助金（基盤研究C）を受けて実施した「前期高齢者の統合感と生き方との関連」の成果の一部である。

文献

1）Erikson EH, Erikson EH（1950）／仁科弥生訳（1977）：幼児期と社会，317-353，みすず書房，東京.

2）岡本祐子：高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究，広島中央女子短期大学紀要．27：5-11，1990.
3）Havighurst RJ（1972）／児玉憲典，飯塚裕子訳（2004）：ハヴィガーストの発達課題と教育－生涯発達と人間形成－，1-10，川島書店，東京.
4）岡本祐子，山本多喜司：定年退職期の自我同一性に関する研究，教育心理学研究．33(3)：185-194，1985.
5）岡本祐子：成人期における自我同一性スティタスの発達経路の分析，教育心理学研究．34(4)：64-70，1986.
6）Rosenthal DA, Gurney RM' Moore SM：From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development, Journal of Youth and Adolescence. 6：525-537, 1981.
7）佐方哲彦，中西信男：青年期の自我発達に関する研究－エリクソン心理社会的段階目録（EPSI）による検討－，日本教育心理学会第25回総会発表論文集．154-155，1983.
8）佐方哲彦：青年期の同一性形成－EPSIによる発達課題の達成過程の解明－，青少年問題研究．34：49-64，1985.
9）佐方哲彦，中西信男：成人期の同一性の発達に関する研究（1）－EPSIによる発達課題の達成意識の変化の検討－，日本心理学会第51回大会発表論文集．549，1987.
10）中西信男，佐方哲彦：成人期の同一性の発達に関する研究（2）－EPSIとEFIとの関連から－，日本心理学会第51回大会発表論文集．550，1987.
11）服部紀子：高齢者の統合感と生き方との関連，桜美林大学大学院修士論文，桜美林大学大学院，2006.
12）佐方哲彦：健常老人の自我同一性と自我機能の分析－EPSIおよびEFIによる検討－，老人問題研究．8：52-57，1988.
13）高井範子：対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究，教育心理学．47：317-327，1999.
14）堀薫夫，古谷嘉隆：人間関係の視点からみた老後の生活設計の問題，大阪教育大学紀要．Ⅳ，教育科学．46（2）：153-166，1998.
15）矢部拓也，西村昌記，浅川達人，他：都市男性高齢者における社会関係の形成，老年社会科学．24（3）：319-325，2002.
16）堀内和美：中年期女性が報告する自我同一性の変化，教育心理学研究．41（1）：11-21，1993.
17）山田典子：老年期における余暇活動の型と生活満足度・心理社会的発達の関連，発達心理学研究．11（1）：34-44，2000.
18）岡本祐子：アイデンティティ生涯発達論の射程．ミネルヴァ書房，東京：192-194，2002.
19）Erikson EH, EriksonEH, JM' Kivnick HQ（1986）／朝長正徳，朝長梨枝子訳（1990）：老年期－生き生きしたかかわりあい109-110，みすず書房，東京.
20）山本則子：家族介護とジェンダー，家族看護研究．6：158-163，2001.
21）杉浦圭子，伊藤美樹子，三上洋：在宅介護の状況およびストレスに関する介護者の性差の検討，日本公衆衛生会誌．51（4）：240-251，2004.
22）内閣府編：高齢社会白書平成19年度版，ぎょうせい，東京：20-27，2007.
23）Havighurst RJ（1972）／児玉憲典，飯塚裕子訳（2004）：ハヴィガーストの発達課題と教育－生涯発達と人間形成－，159-172，川島書店，東京.
24）齋藤美華，小林淳子，服部ユカリ：前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響，日本地域看護学会誌．7（2）：41-47，2005.